

して、主イエスはイスラエルを子どもとし、異邦人を小犬に例えています。

ところが、この母親は引き下がらないので、「主よ、ごもつとでもです。」と言います。自分たちがイスラエルではないこと、小犬と言われることを認めます。「しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」(二七節)と主人のこぼしたパン屑を食べる小犬にたとえます。主の言葉にしがみつくのです。

これは交渉だという人がいます。主イエスとネゴシエーションを行っているのだと言います。ネゴシエーションは聞こえが悪いのですが、娘を愛するゆえの必死の交渉です。

主イエスは彼女に答えます。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように」(二八節)と。この「立派だ」という表現は「大きい」という言葉です。ペトロに対しては「信仰の薄い(小さい)」(一四章三一節)と言われましたが、それとは正反対の言い方です。この女性の信仰は大きく、ペトロの信仰は小さいと言われるのです。

しかし、確かに母親の訴えは自分のことばかりです、個人的、自分の娘の病気のことで範囲が狭いのです。なぜ、大きいと言われるのでしょうか。確かにこの女性は自分の娘のために来ました。しかし、その目は主を見据えて揺るぎないものです。退けられても、すがり続けるのです。

主が大きいと言われるのは、異邦人という自分の小ささを認め、諦めず、問い続け、愛に生き続けようとし、頼ったことです。そのように諦めない信仰を主は大きくして

く、ださるのです。見習わなければならぬのは多くの場合、わたしたちは諦めが早く、主に願う時もしっかりするのでもなく、熱心に祈ることももしないでしまうことです。

この訴えは大きな道を開きました。この母親の訴えによつて、神の救いが異邦人に到達したのです。イスラエルと異邦人の壁を突き破ったのです。わが子を愛するばかりの何のふさわしさも持たない女性の祈りが世界伝道に決定的な役割を果たしたのです。

主イエスがテイルスに行かれたのはこの出来事のためでした。二九節にはもうガリラヤに帰って来られます。すると主は既にこの女性のために自ら進んで、境界を越えられたこととなります。異邦人の壁を越えて、御自分をこの女性に示されました。その信仰を大きくと言われるために来られたのです。

その主の姿は主御自身が異邦人の救いへと向かわれたことを示します。この主の姿が今のわたしたちに与えられている主の姿です。異邦人である私たちです。そして異邦人の国であるここにまで救いがもたらされ、信仰に生きる恵みに与かることができます。

今日の聖書の個所の出来事は今の私たちにつながる大きな出来事です。この女性が娘のために主を待ち受けていたことは、救いが全ての民のものとなるという大きなものになりました。

この人の名前も残されていませんし、その後のことも分かりません。ただカナンの女というだけです。しかし、その娘を愛し、主イエスに救いを求めたことを主は大きなこととして受け入れてくださったのです。

そして、わたしたちも主がこの場所に目を向けてくださっていることははっきりと確かめることができます。こうしてこの場所に主を信じる群れとしての教会が建てられていること。こうして礼拝を守り、信仰に生きる日を重ねていることで、主イエスのまなざしを日々確かめることができるのです。

主イエスがまなざしを向けてくださるので、すから、わたしたちは一層主イエスに目を上げ、主イエスを見据えて生きることができま

す。(七月九日 公同礼拝)

六月講壇一覽

第一主日(六月四日) 公同礼拝

「祝福のしるし」

高橋和人牧師

詩編七八・一七〜二九

マタイ一四・一三〜二一

第二主日(六月一日) 公同礼拝

(こどもの日・花の日)

「教会の誕生」

姜俔米牧師

詩篇六七・四

使徒言行録二・一〜一三

第三主日(六月八日) 公同礼拝

「恐れるな」

高橋和人牧師

イザヤ四三・一〜七

マタイ一四・二二〜三六

第四主日(六月十五日) 公同礼拝

「最初の説教」

姜俔米牧師

ヨエル三・一〜五

使徒言行録二・一四〜二四